

所有傾斜

日本語の敬語などに見られる所有の表現

Possession Cline in Japanese Honorifics

角田太作

(東京大学文学部)

ご紹介いただきました角田と申します。小出先生にはじめてお会いしたのは、1971年、今から25年前になります。私は当時オーストラリアのメルボルンのモナシュ大学におりまして、オーストラリア原住民語を勉強しようという、本当は勉強しなかったのですが（笑）、勉強しようという名目で、オーストラリアに行っておりました。修士課程にいた時に、ワロコ^o語という言語を調べまして、1971年から1974年まで調べました。博士の時にはジャルという言語なのですが、これを1975年に調べ始めまして、1978年に博士号の論文を提出しましたが、現在でも調査を続けています。ですから、私のもともとの学問的背景は、なんて言うか大げさなのですが、出発はオーストラリア原住民語なのですが、後に言語類型論ということにに興味を持ちました。要するに、色々な言語を比べてどういう共通点があるか、どういう点が違うか、ということを見ようという学問ですが、格の問題とか、述語のタイプの問題、他動性、あと逆受け身文と呼ばれるボイスの一表現とか、語順、所有などについて、論文を書いたりしました。私の学問的背景といいますか、ひとつはオーストラリア原住民語、ひとつは言語類型論なのですが、この「所有傾斜」もその研究の一環です。

今日は時間が短いので簡単にお話ししますが、もっと詳しいことを知りたいとお思いになった方は、くろしお出版から出しました『世界の言語と日本語』という、私の拙著を、つまりまずい本ですけどね（笑）、是非ご覧下さい。ご覧になるだけでなく、ご購入いただくとなおさら結構ですけどね（笑）。この第7章についてお話しいたします。実はこの本、黄色いカバーはぼろぼろで取れちゃいましたこの本なのですが、実はこれは私が色々自分であちこちに書いた論文をですね、英語で海外に出したものなどは日本語で書き直して、日本のマーケット向けに日本語で書き直したものです。実はこれは名古屋YWCAでの講義ノートがもととなっていて、以前名古屋大学に勤務してまして、その次に筑波大学に移ったのですが、名古屋大学にいた頃にですね、名古屋YWCAの日本語教育の専門家を養成するコースで文法の話をしておりまして、それがこの本のもととなっているわけなのです。今日はその第7章についてお話ししたいと思います。第7章もごく一部分です。本当はもっとあれこれ第7章に書いてありますけれども、時間がありませんのでごく一部分だけをお話ししたいと思います。

というわけで導入なのですけども、まず、厳しい質問をされる前に言い訳を申し上げておきます。実はこの研究会の事務局から「特別講演をして欲しい」とお話があったときに、最初は「とてもそんなことは私にできません」と申し上げたんです。というのは、特別講演をなさった先生方のお名前を伺ってみたら、大先生ばかりでしてね、「私のような者はそんな特別講演なんて事はとてもできません」と申し上げたのですが、「いや、できなくてもいいです」という約束で（笑）。特別講演というのはふつう基調、なんかこういう格調の高いお話するじゃないですかねえ。私は人格から言って、そういう格調の高い話にはできませんし、それでまた特別講演なんてそういう相応しい内容のお話もできませんので、「とても私にはできません。荷が重すぎます」ってお話したんです。「そういう特別講演なんていう格調の高いことはできませんけども、私自身が調べたことで日本語に関するようなことをお話するのでもいいでしょうか」ってお聞きしました。「ああ、それで結構です」っていうお話でしたので、というわけで今日はこの話をさせていただきます。

お手元のハンドアウトをご覧ください。話の途中でも結構ですので、質問のある方はどうぞ質問なさって下さい。そのハンドアウトの7. 1、所有者敬語というところなのですけど、そのはじめにですが、まず例文の(1)番、(7-1)番から(7-11)番をご覧ください。皆さんこの頃のことを覚えていらっしゃるでしょうか？ もう8年前なんですね、信じられないですね。いや、本当ですよ。あの頃はまだ名古屋大学にいたんですけどね、ちょうどソウルオリンピック、1988年の10月のソウルオリンピックがあって、その1ヶ月ぐらい後からこういう例文が新聞、テレビなどに出るようになってきたんですね。そうなんですよ。それで、ちょっと読んでみましょう。(1)番が、「全体としては、陛下のご様子は落ち着いていらっしゃる」。(2)番が「天皇陛下のご体温はもとの状態に戻られました」。(3)番が「陛下のご体調はお弱りになっている」、「陛下の意識がおりになる」、「病床の天皇陛下は、...その後ご容体は落ち着かれた」、「お体が弱っておられる」、「内蔵が大変お強いようだ」、「血圧は上がられました」、「意識混濁も進んでおられる」、「体の衰弱はもうギリギリのところまで来ておられる」、「尿の出がきわめて悪くなっておられる」というような文なのですけどもね。

こういう例文がだんだんテレビのニュースなんかに出るようになってですね、「何かおかしい敬語だな」って思ったんです。それで例文を集めておいたんですよ。新聞記事なんかそういうのがあると切っておいてね。あの頃は天皇陛下のご容体特集っていうかそういう枠が、社会面にいつもあったんですね。そこでこういう例文が出てくると、赤のボールペンで印を付けておきました。一応私の背景はオーストラリア原住民語ですと言いながら、あちこちに手を出すのが私の性質

です（笑）。それで日本語の専門家の領域を荒らしてしまうという不屈きな人間なのですけども。とにかく、何かおかしい例文だなあ、おかしい敬語だなあと思いついて、そういう敬語の例文を集め始めたんですよ。集め始めたのは12月頃でしたけど。何となくそんな例文があるなあという感じがはじめたのが11月頃だったでしょうか。どうもおかしいと思って例文を集め始めて12月頃、それから毎日毎日一生懸命集めまして、勤務先ですと、全国紙の朝日新聞と、毎日新聞と、読売新聞という全国紙を取ってまして、あと、名古屋の中日新聞というのを取っていますけど、4つの新聞がありますので、それで4つの新聞を毎日毎日、朝、事務室へ行って朝刊をずうっと見て例文を拾って、また帰る前に夕刊を全部見て、例文を拾いました。まあそういうようなことをずうっとしていたんです。それで1月6日に亡くなりましたので、もちろんその時はあれこれ新聞を買い集めておきました。

例文を集めたのは1988年の12月頃なのですけど、こういう例文を集めて、何かおかしいなと思っていたちょうどその翌年3月頃、友人2人から手紙が届きまして、世界の色々な言語の所有の表現の論集を編集しようと思っているのだけれども、おまえも何か書かないかと言ってきましたので、ちょうどこんな事を考えていて、じゃあ書かせてくれと言って書いたのですが、もともと英語の論文なのです。まあ、くろしお出版の本を買っていただければ私が黒板に書く必要はないのですけど、買って下さらない方もいらっしゃると思いますので、書きますが、こういう題目なのです。'Possession cline in Japanese and other languages'（日本語と他の言語における所有傾斜）という題目ですけど、実はこの原稿を提出したのは1989年か90年でした。が、なかなか出なくて、やっと昨年12月に出たんですよ。これで私の人柄がまたわかるでしょ？原稿は期限内にちゃんと出しているわけですよ。他の先生方が原稿を出すのが遅かったのだから、出版が遅れたわけなのですけど（笑）。これが昨年12月にやっと出ました。本の編者が、Hilary ChappellとWilliam McGregor。この2人が編集した本なのですけど、本の題目が'The grammar of inalienability: A typological perspective on body part terms and the part-whole relationship'（切り離すことのできない所有に関する文法的研究 - 前提部分に関する類型論的なパースペクティブ）という題目でして、出版社がベルリンのMouton de Gruyterから出たんですよ。ちょっとこれはとてもご購入下さいとはとても言えない本です。こんな分厚くて、われわれ著者は1冊ずつもらいましたけど、1冊3万円ぐらいしますね。ですから、一応こんなものがあることだけご紹介します。図書館にでもどうぞ、1冊。いろいろな言語の所有の表現が載っています。おもしろい本だと思います。もともとこの論集のために英語で書いたのですけれど、そのあとに、自分があちこちに書いて出

したものをまとめて、特に日本語に関係のあるものだけを中心にしてこんな本を書こうと思ったときに、もともとの英語のものを日本語に書き直したのが、この第7章なんです。話がちょっと横道にそれました。

今述べましたような、所有物を通して間接的にその所有者への敬意を表す言い方、それを私は英語では 'possessor respect' と名付けました。そしてこれを日本語に訳して「所有者敬語」と呼んだのです。それで、尊敬の対象 respectee という言葉を作ったのです。それに対して、いきなり、例えば、「天皇陛下がいらっしゃいました」とか、例文の(12)番のように「陛下は目を開けられた」というように、いきなり直接的に敬意を表す言い方、それは direct respect 直接敬語という言葉を作ったのです。私が日本語の文法についてあれこれ勝手な名前を付けると、国語学者は怒るかもしれませんが、まあ、こういっては何だけど、ちょっと国語学者の方々の術語は不便な場合があるんです。私は国語学の伝統、すばらしい研究は十分尊重しますけれど、どうも私からみて納得できないな、と思うときには自分で勝手にこういう言葉を作っちゃうんです。もちろん誰も採用してくれませんが（笑）。そんなのはどうでもいいんです、私は、自分さえ満足していれば。というわけでして、敬語を2種類に分けて、所有物を通して間接的に敬意を表す言い方、possessor respect 所有者敬語と、直接表す言い方、direct respect 直接敬語と一応分けてみました。

そして、実はこのようなことを考えて、名古屋大学にいた頃、原稿を書き上げて、「名古屋ことばの集い」という研究会で発表したのです。すると、ある方が「角田さん、こんな敬語は特殊ですよ。ふつう言いませんよ」って言うんです。つまり、所有物を通して間接的に敬意を表す言い方、こんな言い方は特殊な言い方で、ふつう言いませんとおっしゃったのですが、実はこれは、ふつうで言うんですね。その実例が13番です。これは実例なんです。名古屋大学にいたときに、東京に用事があって来たんです。それである家庭に食事に招かれていって「いやあ、おいしいですね」とか僕が言いましたら、そこの奥さんかお嬢さんが、「角田さんは舌が肥えてらっしゃるから…」って言ったんですね。それで私のような下々の人間にもこういう敬語を使うんですよ。これは天皇陛下だけではないんです。だから、こういう言い方を天皇陛下だけに使うという考え方は間違いですね。結構わりと使っているんです、ふつうの人間にも。はい、そこまでが導入です。

次に、順番に行くんですけど、私は、ずーっと天皇陛下が亡くなるまで一生懸命例文を集めて、亡くなった後、記事が減りましたから、それで例文採集は止めました。ただ、止めたんですが、「何かおかしい敬語だなあ」と何となく引っかかっていたんです。そして2月末ぐらいだったですか、オーストラリアの友人か

ら手紙が来て、こういう論集出すからお前書かないか、って言ってきたので、また刺激されてあれこれ考え始めたんです。いったい敬語というのは何だろうと思ったんです。あれこれ考えて、ある種のアイデアに到達したわけですが、そこにいくつか段階がありました。

まず、第一の段階はこういう事なんです。こういう敬語は確かに新聞記事とかテレビなんかに出てくるのは言える例なんですけど、実は、言えない場合があるんですね。で、言えない場合があるなって気が付いたことが突破口第一でした。もちろん新聞には、言えない例文は出てきませんから、自分で言えない例文を作ってみました。例えば、例文の(14)番、「*天皇陛下の御用邸が地震でお潰れになった」とか、思わず笑ってしまう。これがいかに言えないかっていう証拠なんですね。これが敬語としておかしいんですよ。15番、「*陛下の所有地が台風で水浸しになりました」、これも言えないですね。このおかしい例文は*印にしてあります。第一段階でわかったことは、このような所有者敬語は、言える場合と言えない場合があるということです。

次に考えたことは、じゃあ、どういう場合に言えて、どういう場合に言えないのかです。これは初めはわからなかったんですよ。私は正直に告白しましたが、私は日本語の専門家ではありません。が、敬語に関するあれこれの研究を読みました。例えば、代表的な岩波新書の南不二男先生の『敬語』とか、あるいは大石初太郎、あの先生も敬語の本を2つか3つ書いてらっしゃいますよね、大石初太郎のものも全部読みました。あとは『国語学』に載っているものをいくつか読みまして、古くは何と1930年の松下大三郎、新日本なんか大文典とかいう長い本がありますけど、あそこまで遡って見たんです。確かに松下大三郎も、今日私が所有者敬語というものの例文を挙げています。「某さんには財産がおありになる」という例文があるんです。だから、確かに松下大三郎も1930年の段階でそういう現象があることに気が付いていたんですが、こういう言い方が言える場合と言えない場合があるという指摘をしていませんし、言える場合と言えない場合の条件は何かということを指摘していないんですね。私はあれこれ考えたんです。

まず常識に言える事は、敬語の場合には、どういう場合に敬語を使うか使わないか、あるいはどういう場合に敬語を使いやすいか使いにくいのか、いくつかの条件がありますね。例えば、これは南不二男先生の『敬語』というご著書によりますと、あっ、私、何とか先生って、南不二男先生って「先生」を付けて、そうかと思うと、大石初太郎と呼び捨てにしていますけども、「先生」が付くか付かないかは、私がその方を尊敬しているかいらないかじゃなくて、懇意にしているかいらないかなんです。私を懇意にして下されば「先生」と呼ぶし、懇意に

してくれない先生には呼び捨てにするわけですからね（笑）。そういうことなんです。尊敬しているいないと全く関係ないんです。これはお付き合いがあるかないかだけの問題なんです。もちろん松下大三郎は私が生まれる前に亡くなりましたから、お付き合いがありませんので、よって先生はつけません。そうしますと、まず、例えば、敬語を使うか使わないか、使いやすいか使いにくいかの第一の条件として、伝達手段は話し言葉か書き言葉かがあります。南先生のお話によりますと、話し言葉の方が敬語を使いやすいんだそうですね。そういう違いがあります。次はどんな文体か。形式張った文体か、くだけた文体か。もちろん形式張った文体の方が敬語を使いやすいわけです。あるいは、敬語の尊敬の対象が聞き手か第三者か。もちろん、目の前の聞き手に敬意を表すときの方が敬語を使いやすいわけです。あるいは、話し手の性で、男性か女性か。年齢、社会階層、もちろんこれも影響しますね。あと、尊敬される側の社会的地位もあります。例えば、誰かについて語る場合も、普通の身分の人について語る場合と天皇陛下について語る場合と明らかに違いますよね。

このような条件があるわけですが、あれこれ考えてみますと、この条件は、どれを見ても私の場合には当てはまらないんですね。これは、いわゆる社会言語学的な要素ですよ。ところが、私の場合の例文というのは、例えば、尊敬の対象は天皇陛下です。だいたい文体は書き言葉的な文体が多いわけですが、または改まった文体。あれこれだいたい条件は同じであっても、1番から11番まで言えるのに、14、15は言えない。ということは、これが言えるか言えないかというのは、社会言語学的な要素ではない、ということなんですね。それで、何かと考えました。

それで次に、気付いたのですが、実はですね、所有物にはあれこれいくつか種類があるという考え方がありまして、例えば、私自身が調べたオーストラリア原住民語なんかでも、切り離せる所有と切り離せない所有と2種類ありますし、あるいは国語学の高橋太郎先生の1975年の長い論文、所有に関する論文ですが、題は言えません。長い題目の論文は損ですね。誰も覚えてくれない（笑）。そうですよ。だから私は論文を書くときも、なるべく簡潔な題目にするんですよ。第7章なんかは、ずばり「所有傾斜」でしょ、覚えやすいでしょう？ 高橋先生は、すばらしい論文なのですが、文献表を見なければ言えないくらい長ったらしい題名なんです。読みますよ、いいですか。高橋太郎先生の1975年『国語学』第103号ですが、「文中にあらわれる所属関係の種々相」。覚えられないでしょう？ だから、「所属関係」とズバツと言えればいいんですね。論文を引用して欲しかったら簡潔な名前にすることですね。そして、高橋先生のご研究でもやっぱりその所有物にあれこれ種類があることを指摘しているわけです。ですから、これで助け

になったことは、所有物にはあれこれ種類があるんだ、ということ、オーストラリア原住民語、私自身の研究も含めてオーストラリア原住民語にそういう研究がありますし、あと、高橋先生は日本語についてあれこれ種類を挙げています。所有物に種類があるということが、ひとつ参考になったわけです。

もうひとつは、物の考え方として、ランキングというか、あるいはこういう風に矢印で書く場合もあるんですけど、こういう物事のランキングという考え方ですね。これは実は、私自身のオリジナルではなくて、言語類型論の世界ですと、Keenan & Comrieの関係節の研究とか、Michael Silversteinの名詞句の階層とか、あるいは、色彩語彙、BerlinとKayの色彩語彙とか、そういう類型論的な研究では、物事をランキングで考えるということは、もうかなり常識になっているんです。それで、どうもいろんな文法を見ていますと、日本語を分析するときにも、他の言語を分析するときにも、分類はしていますが、ランキング的に考える発想があまりないんですね。かなり多くの方は二分類、クロかシロか、とやろうとしますが、二分類でやろうという研究が非常に多いです。二分類じゃなくてもいくつか分類するっていう研究はありますが、このランキングで考えようという考え方はまだあまり広がっていない感じがしますが、少なくとも言語類型論の世界では、それはもう当たり前のことなんです。それで、第2段階で私がヒントになったことは、要するに、こういう敬語はどういう場合に言えるか、どういう場合に言えないかを考えるときにヒントになったことは、所有物に種類があるということと、ランキングがあるという考え方ですね。

実は、それを一緒にして、所有物のランキングを考えた、それが(7-16)番なんです。すると、結構これがうまくいくんです。要するに、結論としてどういうことかと申しますと、さっきの所有者敬語は、どうも私の直観では、ランキングが高い方で言いやすく、低い方ほど言いにくい、そういう感じがするんですよ。そして、名古屋の「ことばの集い」で発表しまして、その聴衆で日本語を母語とする方が50人位いまして、それで皆さんにこういう話をしましたら、「そうですね」と皆さん賛成して下さいまして、その通りだな、とおっしゃるんです。だから、私の直観がそれほど日本人の他の方の直観からずれているわけではなかったんですね。

次にどうしたかといいますと、今度はアンケートをしてみたんです。どういうことかという、この敬語は言いやすいかどうかというアンケートをしたわけですが、その時、手順として例文を、所有物になるべく様々な種類の所有物を例文にして作ったわけです。新聞記事とか…

その前にランキングの中身について簡単にお話ししますと、「身体部分」というのは手とか目とか頭とか、そういうものですね。あるいはさっきの天皇陛下の

例文だと、尿などの排泄物とか、汗とかが入ると思います。「属性」というのは、身長、体重とか、性質とか、あるいは名前もたぶんこの中に入らざるをえないと思います。「衣類」は身につけた衣類です。筆筒に入っている場合と身につけた場合と違うんです。「親族」、「愛玩動物」。次が「作品」、作品というのは例えば、研究者にとっての論文とか、職人にとっての工芸品とか、そういうものです。あと、「その他」というわけで、そういうランキングなんですよ。

で、アンケートしました。結果的には、こういう所有者敬語の出てくる例文というのは、だいたい「身体部分」とか「属性」が多いんですよ。だって、さっきの例文がそうでしょ？ 「ご様子」・属性、「ご体温」・属性、「ご体調」・属性、「意識」・属性、「ご容体」・属性、「お体」・身体部分でしょう。「内蔵」・身体部分、「血圧」・たぶん属性でしょう。「意識混濁」・属性、「体の衰弱」・たぶん属性でしょうね。「尿の出」・属性。そうしますと、身体部分・属性の例文は、まあまあ、あれこれ見つかったのですが、それ以外の例文は自分で作ったんです。いちおう作ってみてアンケートしました。どういう事をしたかといいますと、例文を約30作って、新聞などからの例文を適宜入れて、約30の例文でアンケートしました。（会場の聴衆の一人に向かって）あれ、名古屋にいらっしやいました？ もしかして私のアンケートの餌食になったんじゃないですか？ また来週名古屋に行きます。どこかでお会いしたと思ったんですけどね。だいたい私は人の顔ってわりと覚えているんです、女性の顔は。男性は覚えてませんけど（笑）。だから僕なんか、小出先生にいつお会いしたかなんて覚えていますよ。1971年。たぶん6月頃だと思うんですけどね。そういうわけでアンケートしたわけです。約70人位にアンケートしてもらったんですけど。

例文ごとに、この文は「自然である」、「おかしい」、「どちらともいえない」、と書いておいて、どれかに○を付けてもらったんです。集計したあと、平均点を出したんですよ。「自然である」といえば2点、「おかしい」は0点、真ん中で「どちらともいえない」は1点、そういう風にしまして、平均点を出しました。もし、全員が「自然である」といえば、2点満点の2になるわけですよ、そうでしょ？ 全員が「おかしい」といえば、2点満点の0になるわけですよ。

面白いことに、新聞記事なんかに出てきた例文でも、どう見ても別におかしくないと思われる例文でも、全員が「いい」とは言わなくて、「おかしい」という人が中にいるんですよ。逆に、この例文は絶対言えないだろうと思って、自信を持って作った例文でも「言える」って言う人がいるんですね。というわけで、結構個人差があったんです。個人差はあったのですが、しかし、やっぱり私のはじめの直観はそれほど間違いじゃなくて、結果的には平均点なんです、やっぱり左の方が言いやすく、全体的にだんだん右の方に来るに従って言いにくなる、

そういう結果が出ていますね。ですからやっぱり、私の直観、あるいは研究会のメンバーの40人の方々の直観も、だいたいこのアンケートの結果にそれが反映していたわけです。

ちょっと例文を見ていきたいと思います。（3ページを参照）身体部分ですけど、「天皇陛下の髪」が1.4。「天皇陛下の脚」、これが1.3。まだ点が高いですね。例文の1、2、3、4ですけど、1.2、「ご様子」が1.2、「ご体温」が1.5、「ご体調」が0.5、そして「意識」が0.9。やっぱり身体部分が一番高いですね。属性がやや点下がりますね。では次のページお願いします。今度は衣類ですけど、「天皇陛下のお帽子」0.6、「陛下の眼鏡」1.0なんですけども、私の感じですとちょっと衣類になると言いにくいかな、という感じ、疑問符にしておきました。点がちょっと下がっていますね。同じ帽子でも、天皇陛下が身につけていればこの敬語は言いやすいと思うんですよ。天皇陛下の帽子でも筆筒にしまっていれば、こういう敬語はやや言いにくいと思うんです。結局、密着しているかどうかということですね。このランキングは、所有物が所有者にどのくらい密着しているかという、心理的に、あるいは物理的に密着しているかどうかの度合いだと思います。より密着しているときほど、こういう敬語は言いやすい、密着していないときほど言いにくい、そういう事じゃないかと思います。やっぱり天皇陛下に密着しているほど、天皇陛下同然ですからね。やっぱり敬語を使わないといけないな、と思うわけですね。あるいは、同じ天皇陛下の所有物であっても、所有者と離れていれば、天皇陛下と密着していませんから、天皇陛下とまったく別のものである、という意識があって、やっぱりそれほど敬語を使わなくてもいい、そういうことなんじゃないかなと思うんです。要するに、より密着しているものほど、所有者敬語は言いやすいということだと思います。愛玩動物、やや下がって、私の感覚ではもうほとんど言えない、0.4、0.5ですね。

作品、作品というのは実は私失敗しまして、アンケートを皆さんに配ったあと、高橋先生の論文をもう一度読み直したんですよ。そしたら「作品」という項目があったんです。「しまった」と思ってももう遅かったんです。70人に配ったあとなんです。私はこれ、失敗したんですけど、社会言語学をやる方々なんかはこういうアンケート調査を頻繁にやりますよね。ちゃんとアンケートの調査のやり方を知っているんです。彼らはどうやるかという、まず、パイロット・スタディをするんです。パイロット・スタディというのは、要するに予備テストですよ。テストしてみて、向こうの反応を見て、こっちの質問に不明な点はないとか、こっちの例文のねらいは伝わっているかどうか、を見るんです。社会言語学者、例えば私の友人、都立大の荻野綱男さんなんか、ああいう方々はアンケート調査を頻繁にやっていますから、アンケート調査に慣れているんです、やり方を知っ

ているんです。私の場合は、アンケート調査どころか、さっきやったオーストラリア原住民語のワロコ^oなんて話し手が1人でした。だから、アンケート調査しようがないわけです（笑）。もう、そのおじいさんに必死に食いついて、おじいさんから一生懸命情報を得るしかありませんから。だから、私の世界ではアンケート調査、そんなことは贅沢な話なんです。昨年から調べ出した言語も、ジャルと別の言語、ワンジラという言語を調べましたけれど、話し手がどうも多くても15人くらい。つまり、こういう世界でアンケートなんて別世界の話なんです。私はそういう背景でいきなりこういう世界、いきなり他人の縄張りを荒らすというのは罰が当たるんですね。罰が当たっちゃったんです。それで、「しまった」と思ったんです。やっぱりこういう傲慢な態度は良くないですね。もっと謙虚にあるべきだったんです、実は。こういうしっぺ返しが来たのですが、もう間に合わない。何十人と配ったあとなので。やむを得ずこれは入ってませんけど。皆さんの判断を聞くと、やっぱり作品というのは愛玩動物の下ぐらいがいいんじゃないか、とおっしゃるわけです。「天皇陛下のご著書」。その他の所有物、「天皇陛下のお車」が0.4、「御用邸」、「所有地」が0.4、0.3。「お車」でも、天皇陛下が乗っている場合が言いやすいですね。例えば、「天皇陛下のお車が到着なさいました」とか。こういう場合でも、実際に天皇陛下が乗っているときの方が言いやすいでしょ？ 要するに密着しているときの方が。天皇陛下が乗っていなかったらちょっとこれは言いにくいと思うんですけど。というわけでして、結論として、このランキングがあって、こっちの方が言いやすい、こっちの方に来るほど言いにくい、という傾向は言えると思います。

実は、このアンケートに親族は入れなかったんです。なぜかというと、親族は難しいんです。まず、例文を挙げますけど、いいですか、例文の(7-31)を見て下さい。「A氏の令息が大学に入られた」という言い方がありますが、これは大石初太郎の例文です。常識的に言えば、これはA氏への敬語、たぶん所有者敬語だと思います。しかし、可能性としては、令息への敬語である、と言えないことはないんですね。そうでしょ？ あるいは、A氏と令息両方への敬語である、と言えないこともないですね。すると結局、これは所有者敬語の例としてはちょっとまずいんです。というわけで、親族の場合は、所有者の方も人間、所有物の方もいわば人間ですから、所有物の方への敬意という可能性が否定できませんから、いい例文がつくれなかったんです。結局これは、この中に入れておかなかったんです。実はこのランキングは、日本語の敬語以外の様々な文法現象に反映してしまして、あるいは日本語以外の、例えば私の知っている言語、オーストラリア原住民語ワロコ^o、ジャルとか、英語とか、いろいろな言語に反映しています。その場合には親族ちゃんとランキングに参加して来るんです。ですから、ランキ

ングに括弧ではありますが、親族をおく理由があるんです。

次の方に行く前に、ちょっと、またまたアンケートの失敗のお話をしておきます。アンケートするときには、さっきお話ししましたとおり、自然であるか、どちらとも言えないか、おかしいか、どれかに○を付けて下さいとお願いしました。ただ、「おかしい」といった場合、どうしておかしいですか、理由を書いて下さい、とはお願いしなかったんですよ。そこまでしますとアンケートに答えてくれないですね。やっぱり研究する側は傲慢なんです。俺の研究は立派な研究である。みんな熱意を持って俺のアンケートに答えてくれると思っているでしょう？ アンケートを頼まれる側は迷惑でしょうがない。だから、ちゃっちゃっちゃっと答えを書いちゃうわけですよ。だから、理由は何ですかなどと書いてもらう方が間違いなんです。回答する側の労力をなるべく少なくしたアンケートが一番いいわけです。というわけで、おかしい場合にどうしておかしいですか、そんな理由は聞かなかったです、もちろん。ところが、あとで何人か個人的に理由を聞いたんです。面白かったですね。

例えば、「陛下の熱がある」の「の」を「に」に変えればいいのか。あるいは、「天皇陛下の髪が白くなられた」を「髪は」、「は」に変えればいいのか。こっちのもくろみと全然関係ないことで向こうは見ているんですね（笑）。こっちのもくろみは、所有物の違いを見て欲しかった、こっちとしては所有物の違いで調べたいわけです。ところが、向こうはもちろんそれに気がつきませんから、気がついたら困るわけで、気づいたらこっちの意図が分かっちゃいますから。本当は所有物の違いで調査したいわけですけど、向こうは「の」を「に」に変えればいいのか、「が」を「は」に変えればいいのか、そういうところで見ているんです。

こんな事もありましたよ。齊藤修一先生ってご存じですか？ 慶應大学の先生。あの先生にもアンケートしていただいたんです。そしたら、あの先生は、敬語で「…してらっしゃいます」とか、「お読みになる」とか「読んでいらっしゃる」、それは○なんですけど、「読まれる」とか「られる」という敬語は全部、ダメ、ダメ、ダメ、ダメなんです。全部一貫してダメ。実際には新聞にそういう例文は載っているんですよ。齊藤先生にお聞きしたら、「いや、あれは私の日本語では言わない」と言うんです（笑）。いや、齊藤先生はいわゆる屋敷町の「いとやんごとなききは」にある方なんです（会場笑）。大崎の近くの上長者丸とかいう屋敷町で生まれて育った、そういう方なんです。そういう由緒ある、そういう日本語を話す方なんです。だから、あの方に言わせると、「られる」というのは西日本の田舎ものの言い方である、ということは言いませんけれども、私流に解釈すればそういうお返事でした。つまり、齊藤先生のお返事だと、たとえ身体部分、ランキングの一番上の方の例文でも、「られる」だったら「おかしい」なんです。

こんなのもありましたよ。名古屋大学の文学部の日本史の某先生 - あえて名前は申しませんが - にお聞きしたら、全部「おかしい」なんです。身体部分、属性、ランキングの上の方も「おかしい」なんです。理由は分かりました。あの先生は日本史の専門家なんですね、で、天皇制に大反対なんです（会場爆笑）。だから、天皇なんかに敬語を使う必要ない、って考えているんです。まあ、そういう返事もあったわけです。だけど、それは実験の誤差ですけどね、そういう実験の誤差がありましたが、それでもやっぱり全体的にはこういう傾向が見えますね。だから、そういう誤差があっても、アンケートの数をたくさん取っておけば、そういう誤差はだんだん消えてくるわけですね。

今度はハンドアウトの7.1.4.に行きます。（4ページを参照） いままで見てきたものは、実は、全部、自動詞文の場合なんです。いわゆる尊敬語ですね。ところが、目的語の場合、いわゆる謙譲語の場合と、あるいは尊敬語であっても他動詞文の主語の場合は違うんです。結論としてはどういうことかということ、ちょっとハンドアウトに入れるのを忘れましたけど、「身体部分」というのがありますよね。「その他の所有物」というのがありますよね。

自動詞文の主語の場合、いままで見た「天皇陛下のご体温」とかいうのは、「属性」の辺りまでしか言えないですね。面白いことに、他動詞文の主語だと、もっと言えない。「属性」の辺りも言えないんです。この辺がいわゆる尊敬語ですね。で、直接目的語、間接目的語とありますけど、これがいわゆる謙譲語ですが、この場合は全部下まで言えるんです。これ、面白いですね。もう一度申します。学校で教える言い方は、尊敬語と謙譲語と教えますけど、これ、どこか、ほかで習った、誰から習ったかは覚えてませんけども、学校でいういわゆる尊敬語というのは、主語尊敬である、学校でいういわゆる謙譲語というのは主語以外の尊敬である。どこかでそう習ったんですよ。どこで習ったか覚えてませんけども。これで全ての場合がうまくいくか知りませんが、これはかなりいい言い方ですね。だと思えるんですけどね。

そうしますと、いままで見た言い方、いままで実は、「天皇陛下のご体温は」とか、「ご様子は」というのは、全部自動詞文の主語でしたけど、自動詞文の主語の場合というのは、せいせい身体部分と属性ぐらい、ちょっと下の方は言いにくい。ところが、目的語の場合、下の方まで全部言えちゃうんですね。たとえば、例文を見て下さい。例文の(7-32)「侍女が天皇陛下の手をお取りした」、1.5でしよ。手は身体部分ですよ。 (33)番「田中さんは天皇陛下の御用邸をお見かけした」、これ、その他の所有物。ちょっとこれ、点数が低いんです。0.8、予想に反して。あとで訊きましたら、私の日本語ではおかしくないんですけど、ある種の方々は「見かける」といった場合は、目的語は人間じゃなくてはいけないんだそ

うです。つまり、御用邸の場合は、「見かける」という動詞はそもそも使えないということだそうですね。ちょっと例文がまずかったですね。これは景山太郎さんが教えてくれましたけど、「田中さんは天皇陛下の御用邸をお守りした」、全然問題なしですね。その他の所有物、言えますね。あるいは、「山田さんは陛下のお荷物をお持ちした」、これも全然問題なし、言えますね。直接目的語は上から下まで全部言えます。間接目的語もそうですね。(36)番、「天皇陛下の手にお帽子をお渡しした」、1.4。「陛下の御用邸にそのお荷物をお送りした」、1.5。下までずっと点が高くて言えるわけです。

ところが不思議なことに、尊敬語の場合、他動詞文の主語っていうのは本当に言いにくいですね。たとえば、「天皇陛下の穏やかな目はいつも国民の心を安らかにしていりました（または、しておられました）」、0.8。天皇陛下の目ですから身体部分、一番上ですね、ランキングの一番上。次が、「陛下のご病気が国民に大きな衝撃をお与えになった（または、与えられた）」、これが属性ですから、ランキングの2番目です。これも0.6。点が低いですね。その他の所有物ですと、もう全然言えませんね。「天皇陛下のご用地がその地域の開発を防がれた（あるいは、お防ぎになった）」、0.4、点が低いですね。僕は非常に不思議なんですけど、同じ尊敬語で、同じ主語であっても、自動詞文の主語の場合はちょこちょこと言えますけど、少しは言えますけど、他動詞文の主語はほとんど言えないですね。同じ日本語で主語と言っても自動詞文と他動詞文ではこんなに違いがあるわけですね。

もう1つ非常に不思議に思ったことは、ほんと、これ不思議なんですけど、(38)、(39)、(40)、これはおかしいですよ。ところが、こういう文が日本語として言えないかというと、言えるんです。要するに、尊敬語を取っちゃえば言えるんですよ。それが、(42)、(43)、(44)です。「天皇陛下の穏やかな目はいつも国民の心を安らかにしていりました」、1.3。「衝撃を与えた」、1.7。「防いだ」、1.4。同じような例文ですけど、敬語の要素を取っちゃうと、バーンと上がるんです。どうしてなのでしょうね。だから、こういう文自体が日本語で言えないことではないのですが、なぜか不思議ですけど、こういう文は言えるのですが、他動詞文の主語の場合に限っては、言えるんですけども、敬語が入っちゃうと言えない。どうして敬語が入っちゃうと言えないのかよく分かりませんけど。

例文の(49)から(52)は、直接、敬語には関係ないことです。(5ページを参照) ちょっとついでにお話ししますけど、いま、目的語がいちばん言いやすい、次が自動詞文の主語、次が他動詞文の主語、そういう順番だったことをお話ししましたが、このランキングは実は、世界の多くの言語の名詞と動詞の複合語にも反映しています。たとえば、目的語、自動詞文の主語、他動詞文の主語の複合語。

日本語の場合には、こんな感じですよ。複合語。目的語の場合がいちばん言いやすいですね。魚を釣る、魚釣りとか、いちばん言いやすい。自動詞の主語は、雨が漏る、雨漏りとか。少しは言えますよね。他動詞文の主語の複合語は、ほんと、少ないですよ。たとえば、虫が食う、虫食いとか。神隠し、神が隠すわけですね。少しはありますけど。で、英語ですと、非常に大ざっぱに言って、こんなですよ。他動詞主語の位置はもう言えません、複合語ね。fox-huntingなんて言えますよね。「キツネ狩り」。bird-chirping「鳥がさえずる」。で、他動詞主語の位置はほとんど言えないですね。私が調べたオーストラリア原住民語のジャルなんて言語ですと、ジャルはほとんどcompoundはないんですが、ワロコ^oという言語ですと、目的語まで複合語があるんですよ。

ですから、ほんと、不思議なんですけど、さっき所有者敬語を言いやすいランキング、目的語がいちばん言いやすい、次は自動詞文の主語、次は他動詞文の主語、なんてことをランキングが反映していることを話しましたが、同じランキングが、ほとんど敬語と関係ないような世界でまた反映しているんですよ。しかも、これは世界中の言語にいろいろ反映しているらしいんですね。だから、いろいろな言語っていうのは、一見違うように見えても、こうやって見ていくと、非常に似ている点があって面白いな、と思いましたけど。

7.1.5(5ページ)ですけど、私はおもに興味の中心が文法ですので、文法的なことを調べますが、社会言語学をやる方だったら、こういう敬語なんかでも、地域の違いとか、職場の違いとか、年齢の違い、性別の違いとか、あれこれ見るわけですね。私はこのアンケートをするときに、そういうことを注意して見なかったんです。70人にアンケートした結果、おもに職場、先生方、事務官の方々とか、大学生とか、そのご家族とか、あれこれお願いしたのですが、傾向としては、やっぱり全体的に、ランキングの高いほど言えて、低いほど言いにくいですけど、傾向としてはやっぱり年齢を見ると、年齢が高い人ほど、下の方まで敬語を言う傾向がありましたね。若者ほど敬語を言わない。年齢はそういう傾向がありました。性別ですが、女性の方がこっちに敬語を言うんですね、男性よりも。特に、実は、名古屋大学にいつも来てた、生命保険の外交員の方がいらっしゃいまして、その方をお願いしたんです。そして職場に持って行って下さって、20人くらいアンケートしてくれましたけど、ほとんど全部○なんです。あの方々はほとんど過剰敬語といえるくらい、全部敬語をよしにしちゃうんですね。やっぱり、職業があります。それと思ったことは、銀行の方なんかやってもらえば良かったですね。どうも銀行の方々なんかほとんど全部○になったかも知れないですね。そういう職業の違いもありますね。傾向としては、全体的にはこういう風にランキングの下の方では言いにくい、上の方で言いやすいということなんですよ。

ハンドアウトの最後、7.1.6、正しい敬語との関連ということなんですけど、敬語と言うのは非常に皆さん興味を持つテーマでして、いまは違いますけど、もうちょっと前だと外国から留学生が日本にきて、日本語を研究する。「何を研究しますか」と聞くと、半分くらいは「敬語」と言った時代があったような気がするんですね。このごろはモダリティでしょ？ 半分以上モダリティですけどね。しばらく前は、来る留学生の半分以上は「敬語やります」って感じだったんですね。やっぱり、敬語っていうのは非常に研究が多いですし、本もたくさんありますし、たぶん私の推測では、日本語の研究テーマでもっとも論文の数、本の数が多いのは敬語じゃないかと思うんですけどね。皆さん敬語に興味があるんですね。『ニュースステーション』なんかで久米宏のところに頻繁に電話がくるんですけど、頻繁にくる電話のもっとも多いのは、「今日のネクタイは背広に合っていない」というのがいちばん多いのだそうですね（笑）。次が、「今日の敬語は間違っている」だそうですね。皆さん敬語が好きなんですね。敬語について語ることが好きなんですね。

それで、大石初太郎の本を読んでましたら、ラジオの番組で、聴いている人があれこれ電話してくる番組があるじゃないですか。こういうことがあったそうです。家の近所の奥さんはこんな敬語を使ってます。「まあ、お宅にはこんなかわいいワンちゃんがいらっしゃるんですか」とかね、家の奥さんの敬語は間違っているんじゃないか、という反論が。あるいは、家の近所の奥さんには、「奥さん、お宅にはきれいな金魚がいらっしゃいますね」とか、そういう敬語を使う、あれは間違っているとかな。そういう電話があるそうです。すると、反論があって、「いや、これは金魚に愛情を持った良い敬語である」とかいって、反論があるんだそうですね。それで、大石初太郎先生は、いま、なぜ先生と言ったかということ、一応これから批判しますから、やっぱり批判するときは「先生」くらい付けようと思ってね（笑）、付けたわけですけどね。大石初太郎先生は、こういう風に書いています。こういう敬語を使う人もいます、それはおかしいという人もいます、と言っておいて大石先生は、私としてはこういう敬語を言いません、で終わっちゃってるんです。

しかし私に言わせると、それで終わってはつまらない、学問は。じゃ、どうしてなのかという背景を、しゃれた言葉でいえばメカニズムですね。じゃあどうしてどうなのかというメカニズムをもう少し探った方が面白いですよ。こう言う人もいる、言わない人もいる、で終わったらつまらないですよ。私に言わせるとこういうことは、所有物のランキングがあるわけですが、ある方は敬語はずっとこの辺まで来て、愛玩動物まで言う、金魚とかワンちゃんとか。ある方は愛玩動物まで言わない。背景にはこういうランキングがあって、ランキングで動い

ているのではなかろうかという私の考え方、そういう考え方の方がちょっと学問として面白いと思うんですね。だから、こういう事実がありますということは大事なことです。もちろん、まず事実を指摘することが大事なことののですが、できれば、その背景のからくりを見ることですね。からくりが分かった方がもっと面白いですね。実は『世界の言語と日本語』の第7章には、あとから英語とか、オーストラリア原住民語とか、あれこれのランキングがこれ以外に反映している例をずーっと挙げてありますので、興味のある方はぜひお読み下さい。何か厳しい質問とかコメントとか追及などどうぞ。

（質問者1） 図7の×は何ですか？

（角田） ×というのは、この例文の点の位置です。つまり、身体部分の例文は1.4と1.3ですよ。例文7-17が1.4、7-18が1.3。×は例文の平均点の位置を示しているわけです。すると、属性は1.2、1.5、0.5、0.9。この×のところがちょうど1.5、1.2、0.9、0.5になってますね。×ってまずかったですかね。

（質問者1） そうしたら、例文を変えると平均点が低くなりますか？

（角田） なるだろうと思ったんですよ。これはこの調査の問題点なんですけど、どういう例文を使うかで点は変わるわけですね。だから、今にて思えば、もっと点が上がるような例文を工夫して使えば点が上がったと思うんですね（会場笑）。いや、実にそうなんです。それは調査する側のmanipulationですね。ですから、その辺がアンケート調査の危険でもあるわけですよ。だから、原発賛成・反対のあれも、非常に危険なんです。うまく誘導尋問するアンケート調査がありますからね。実は私の予想としてはもっと点が高いたらと思ったんですけど、それでも属性もですよ、4つ散らばっているでしょう？ 平均すれば身体部分よりちょっと低いですよ。だから、きれいな図を出そうと思ったら、それはちょっと難しいわけ。逆に言うと、自分の都合のいい例文だけを集めてアンケートやって、始めっから自分の都合のいい結果の出るようなアンケートをしちゃう、そんな方法もありうるわけですね。これは非常に正直に書いたわけですけどね。どうしたらいいんでしょうね。僕はこれでもう懲りましたから二度とアンケート調査はしたくない。

はい、どうぞ。

（質問者2） 例文(7-3)「陛下のご体調はお弱りになっている」はマイナス評価の内容の文ですから、敬語が言いにくいのではないのでしょうか？

（角田） (7-3)はアンケートに入っていないんです。アンケートに入っているのは、17、18です。おっしゃるとおりですね。この内容なんです、プラスのいい評価の文の方が敬語は言いやすいでしょうね。あの…

（質問者2） すみません、話の途中で。(7-39)を見て、例えば、「陛下のご発

言が国民を勇気づけられた」のような文はプラスの評価を表す文で、「地震でお潰れになった」はマイナスの評価を表す。そして、プラスの評価を表す文の方が敬語を言いやすい。このまま比較するのは不適當ではありませんか？

（角田）　そうですね。文の内容で、プラスの評価のいい文の方がこういう敬語を言いやすいですね。悪い評価の文というのは敬語を言いにくいですね。特に破壊とか、壊すとか。おっしゃるとおりで、本当は、理想としては、僕らが中学校・高校で理科で習った実験をやったときに、実験というのは条件を一定にする、と習いましたよね。調べたいところ、variable変数だけを変えて、ほかは全部一定にする。それが実験としましては望ましいわけです。このアンケートも、本当はそれが望ましいわけです。しかし、言語学の場合は、それはできないですよ。例えばこの場合、いちばん極端なことをいうと、この場合のいちばん調べたいvariable変数は、所有物ですよ。所有物だけを変えて、ほかは全部同じにする、すると例文が作れないんですね。ですから、おっしゃるとおり、実は『世界の言語と日本語』の122ページから123ページに書いてあるんですけど、なるべく例文の条件は一定になるように努力しました。もう少しできたかもしれませんが、しかし、自然科学のような一定にはできないんですね。ですから、アンケート調査の限界だと思うんですね。ですから、文法の研究というのは、アンケート調査と直感と、両方使わないといけないと思うんです。直感としては、このランキング通りだってことは賛成して下さったんです。研究会の約40人のメンバーが賛成して下さったんですけど。ところが、実際にアンケートであれこれ点を出してみると、こういうずれが少し出てきますので、これは要するに例文の問題なんですね。ですから、アンケートが必ず実体を、アンケート調査の結果がいつも実体を表すかどうか、というのは別問題ですね。原発賛否はかなり実体を表すでしょうけども、文法のこういう調査の場合は、社会言語学もそうかもしれませんが、必ずしもアンケート調査の数値そのものが実体を表しているとは限らないわけですね。ですから、そういう点は考慮してアンケート調査もやってみるし、直感の方も重視する、両方を使うことが大事だと思うんです。ということでいいでしょうか。

はい、どうぞ。

（質問者3）　ここの例文には、所有物について述べている場合と、所有者について述べている場合とがあって、場合によっては敬語の自然さが異なるのではないのでしょうか。

（角田）　ありがとうございます。実は、今ご指摘下さったことも、英語版の論文には書いておいたんですけど、これは正直に告白します。私自身の観察ではなく、影山太郎さんが助言して下さったことなのですが、例文の(25)、(26)をご覧

下さい。今、砂川先生がおっしゃって下さったこととは、たぶん表現は違っても、同じ内容のことだと思うんですけど、影山さんが指摘して下さったんですけどね。この例文の(23)、(24)の違いについて影山さんがおっしゃったことなんですが、天皇陛下の帽子が古くなったことと、天皇陛下の眼鏡が魅力的であるということというのは、天皇がこれだけ違うっていうのはこういうことなんじゃないか、って影山さんはおっしゃるんですよ。例えば、天皇陛下の眼鏡が魅力的だったら、天皇陛下ご自身が魅力的に見えるわけですよ、そういうことなんです。要するに、眼鏡が魅力的であることの影響を被って、いま砂川先生がおっしゃって下さったことなんですけど、天皇陛下の眼鏡が魅力的だあることの影響を被って、天皇陛下も魅力的に見えちゃうわけですよ。いわばその影響を被るわけですね。ところが、天皇陛下の帽子が古くなった、は自動的に天皇陛下自身が古くなるわけではないんですよ。だから、天皇陛下自身の帽子が古くなるということから、機械的に天皇陛下がそのことで何か影響を被るわけではない。その事態から直接に影響を被ったときの方が点が高いんじゃないかな、ということを、実は影山さんが指摘して下さった。たぶん、そういう点が(23)と(24)の、0.6と1.0の違いに出ているんじゃないかな、というようなことを助言して下さったんですけど、そういうことでしょうか。

はい、どうぞ。

(質問者4) 所有傾斜は被害の度合いを表すのでしょうか。

(角田) それがですね、このランキングがいったい何かって言うのは難しいんですよ。私は一応ですね、『世界の言語と日本語』の119ページから120ページにおいて書いておいているんですけどね、こういう風に書きました。「この所有傾斜は所有物と所有者の間の物理的なまたは心理的な近さ・密接さの程度を表している」ではなかろうか。物理的だけとは言いきれない。心理的だけとは言いきれない。いま、砂川先生がご指摘下さった、影響を被ると言うのは、かなり心理的な面ですよ。そういう面があると思うんですよ。だけど、「天皇陛下のお車が到着なさいました」と言った場合には、実際乗っているか、乗っていないかで違うのは、物理的な距離ですよ。ですから、物理的な密接さという側面もあって、でやっぱり何か心理的な密接さの側面もあって、両面あるような気がするんですけど。どうでしょうか。

(質問者4) もう一ついいですか？ 先生の後ろの黒板にある、直接目的語と、自動詞の主語と、他動詞の主語のランキングですけど、どうしてそういう風になるかということについて説明して下さい。

(角田) これは、たぶん、GB的な文法の方々はお考えがあるんでしょうけど… たぶんああいう方だったら、どういう風に考えるかってことを… 時間はいい

いんでしょうか？

(司会者) お疲れでなければもう少しだけ…

(角田) 実はこういう話は大好きなんです(会場爆笑)。もうやめられないって感じ(笑)。悪い人を呼んでしまった… それで、私は思うんですが、たぶんチョムスキー風の言語学をやる方々だったら、node、tree structureを書いて、やっぱりこれは文の構造からして、自動詞文の主語と動詞は非常に密接である。だから、こういう複合語を作りやすい。他動詞文の場合はやや離れているんですね。だからやや複合語を作りにくい、というようなことを言うんじゃないかなと思うんですが、こっちだって条件は同じじゃないですかねえ。すると彼らは、もしかしたら、いや、S-nodeがあるからちょっと離れている、とか言うかもしれないですね。こうなると、ややこじつけ的な感じがしますよね。で、もう少し何か、意味的というか、心理的なものがあるんじゃないかな、と思うんですけどね。どうなんでしょう。確かに、英語の、チョムスキー風の方々っていうのは、いつも英語を基準にものを考えますから、世界の言語は英語と同じであると思ってますからね。たぶんこういう風にしちゃうと思うんですけど(笑)。ほかの言語を無理矢理に英語の枠に当てはめちゃうんです。非常に無理な学問をやっていると私は思うんですけど。ところが、どうも複合語の作り方が文の構造、例えば、英語のような言語だと非常に文の構造がぎっちりしてますよね。語順を変えると意味が変わっちゃいますしね。例えばS V Oと固定してますよね。V S Oとか言えませんもんね。英語というのは文の構造が非常にぎっちりした言語ですから、あいう言語を論じている限りは、この理屈がやや通りそうなのですが。

けども、実はこれが、オーストラリア原住民語なんかは、語順がかなり自由な言語なんです。自由な言語で、このようなものを当てはめるのはやや無理な言語だと思えますね。Ken HaleというMITの方が言い出したことで、これはたいへん面白いことだと思ったんですけどね、世界の言語は大ざっぱに言って2種類あると言っています。英語みたいに文の構造が非常にぎっちりしている言語、あるいはconfigurationalと呼んで、一方オーストラリア原住民語のジャル語の近くの言語でワルビリという言語がありますが、あれなんかは語順が非常に自由で、non-configurationalですね。そうしますと、確かに英語みたいに構造のぎっちりした言語で、こういう言語の場合は、このようなことを言えるかもしれませんが、私のやった言語なんかはかなり語順が自由ですからね。少なくとも、表層を見る限り、こんな構造は立てられないですね。だから、そういう言語の場合、こういう理屈を当てはめることは無理ですよ。

それで、彼らはまた屁理屈を持ってきて、「いや、こういう言語は深層ではこうだ」と言うかもしれませんがね。そこまで言うと、きりがありませんから、

そうなるのと何とでも言えますからね。そうなる、「住専で国民の負担はありません」と言うことと同じですからね（笑）。だから、そういう言い方は私はしたくない、私の立場は。そうすると、もう少し事実には忠実、負担があることは認めましょう、というわけですね。そうすると、かなり語順が自由で、このようなぎっちりした構造を持たない言語の場合には、なぜこういうランキングがあるかということを文の構造で言えなくなっちゃいますよね。そうすると、もう少し別の理由があるんじゃないかな、と思うんですが。

（質問者4）他動詞にとっては目的語があることが重要なのですよね。つまり、目的語がいちばん大事になってくるのですよね。自動詞にとっては、主語しかないのですよね。

（角田） ええ。実は、本当は、「自動詞文の主語」って言っていますけど、たぶんここは実は2つに分けなくちゃいけないと思うんですよ。そんなことは今まで考えたことありませんけども、これ、ほんと、不思議なんですよね。つまり、語順がぎっちりした言語でも、語順が自由な言語でも、同じランキングが出てくると、不思議ですよ。そうしますと、これは構造の問題じゃないと思うんですよ。もう少し何か別の、意味的なというか、何かそういう理由があるんじゃないかなと思うわけです。私はよく分からないんですが、少なくとも、今度は自動詞の主語を2つに分けなくちゃいけないと思うんですよ。

実は、何とかして売り込もうとして必死に宣伝していますけど、この、拙著のですね、102ページから103ページに書いてあることなんですけど、どういうことかと申しますと、これはもともと私が考えたことではなくて、Robert Dixonという原住民語の大家が言い出したことを、私がそれなりに、少し改良して言い換えたことなんですけど、結構多くの言語で、他動詞と自動詞の対応があるんですね。ところが、対応の仕方が違うんですよ。他動詞文の主語があるでしょう、目的語がありますよね、自動詞文の主語、そうすると、自動詞主語が他動詞主語に対応する場合と、他動詞目的語に対応する場合と2つある、というんですよ。

だから要するに、自動詞の主語は2種類あるということですね。さっき私は、同じ主語でも、他動詞主語と自動詞主語と2種類あります、日本語でもそれは区別が必要です、ということを申しましたが、実は自動詞文のは主語が2種類あるらしくて、例えば、これは、私の知るかぎり、ずーっと前からSapirなんかも言ってますけど、これ、1914年くらい、もういつまでさかのぼるか知りませんが、私が書いているのはこういうことです。英語なんかで、stopと言うでしょう。

John stops the car. The car stopped. この場合は、他動詞文の目的語と自動詞文の主語が対応しています、そうでしょう？ John stopped the car. The car stopped. John opens the door. The door opens. とかね。John moves the car.

The car moved. でしょう？ 実は、僕らが学校で習った英語では、形をまったく変えないで自動詞と他動詞が対応しますよ、と習った。実はこのタイプのことなんです。で、これは全部、意味的な共通点があるんです。非常に共通点があって、「変化」なんです。例えば、John opened the door. 変化を起こしたわけでしょう。John stops the car. 変化を止めたわけでしょう。変化を起こすか、変化を止めるか、あるいはkeep、英語のkeepは、keep the temperature lowとか言って、The temperature keeps low. とか言って、あるいは変化が起こることをそもそも抑える、あるいはこのタイプですね。変化を起こすか、変化を止めるか、変化を起こることを抑えるか、いずれにしても全部「変化」なんです。ほとんどこうなんです、傾向としてはね。

ところが、こっちは英語なんか、例えば、drinkとかsmokeとかeatですけど、例えば、John drinks beer. といえ、これは他動詞でしょう。しかし、John drinks everyday. これ、自動詞なんです。そうすると、傾向としては、drink、smokeもそうですしね、eatもそうですが、私のやった原住民語もそうです。Dixonがやった原住民語もそう、英語も、たぶん日本語もこういう傾向だと思うんですけど、大きな傾向として、こういう対応とこういう対応があって、こっちは主に「変化」なんです、こっちは主に、飲み食いとか、考えるとか、思うとか、夢見る、そういう「身体動作」なんです。これはオーストラリア原住民語、私のやった言語は見事にそうなんです。そして、英語の場合は、drinkでもstopでも、形がまったく変わらずに同じ対応があるわけですが、日本語の場合は、「止まるー止める」とか、「落ちるー落とすとか」、微妙に変わりますよね。ところが、英語のopen式に形がまったく変わらないのが25くらいあるんだそうですね。村木新次郎さんの本に書いてあるそうです。「窓を開くー窓が開（ひら）く」でしょう。「窓を閉じるー窓が閉じる」ですよ。ね。「何かの量を増すー何かの量が増す」、「温度を保つー温度を保つ」、ちょうど英語と同じタイプですけどね。

すると、世界的な傾向としては、もういちど申しますが、自動詞と他動詞が対応する場合には、目的語の方に対応する場合と、主語に対応するパターンがあって、大まかに言ってこっちは主に「変化」を表す場合なんです。そして、主にこっちは、飲み食いとか、考えるとか、そういう「身体動作」、あるいは「心理作用」といいますか、そうすると、自動詞といいますが、どうも2種類あるらしいんです。たぶん、このランキングを考えるときにも、このようなことを考慮しなくちゃいけないんじゃないでしょう。まあ、広瀬先生も僕の仲間ですから安心してこういうことを言っちゃうんですけど、今どきチョムスキー風の言語学をやる方々は、こういうのは洒落た言葉で、unaccusative hypothesisなんて言ってますけど。要するに、自動詞には2種類あって、いわば、他動詞の主語に対

応する自動詞と… まあ大体同じ事を言っていると思いますが、David Perlmutterの1978年の論文ですけど、たぶんそんなことじゃないかと思うんですが、私は私で原住民語で考えましたけど、それでも自動詞に2種類あって、他動詞文の主語に対応するタイプの自動詞と目的語の方に対応するタイプがあって、大雑把に言えば、こっちはまた「変化」的なものが多いらしいですね。一方は飲み食いとかそういうことらしい。どうもこれ、結構世界の多くの言語の傾向らしいんです。

今度は自動詞のランキングを考えた場合に、さっき複合語を作りやすいランキングを考えたわけですけど、これなんかはどっちの自動詞が作りやすいんでしょうね、複合語だと。英語だと、直感的に言えば、同じ自動詞文の主語でも、目的語の方に対応する自動詞文の主語の方が上で、他動詞文の主語に対応するような自動詞文の主語の方が低い、と思いますよね、直感的には。

だけど、どうなんでしょう。英語なんかで、自動詞文の主語でcompound、あれはBernard Comrie先生が挙げた例ですが、bird-chirping。だけど、rain-droppingとかrain-fallingとか言えますかね。たぶん、fallの方はわりと目的語的な… 「なんとかdropping」と言えますかね。意味から言えば、dropの方が目的語と対応する言い方ですよ。そうでしょうか？ chirpなんて「鳴く」ですから、こっちは他動詞の主語に対応する言い方ですよ。だから、英語の場合は、同じ自動詞の主語でも複合語を言いやすいですかねえ。

（参加者の一人） bull-fightなんかありますよね。

（角田） bull-fight。何でしょうね、あれ。もともと対応する文はどういう文でしょうね。Bulls fight. ですかね。シカゴ・ブルズとかいってね、スーパーソニックスとかいってね。話題がどんどん飛びますけど。Bull-fightが、もし対応する文としてThe bulls fight.という文があるとしたら、たぶんこれは他動詞文の主語の方に対応する言い方ですよ。もちろんさっきのbird-chirpingといい、bull-fightといい、なんか予想に反してこっちの方のランキングが複合語を言いやすいですね。実はこういうことについて今まで考えたことがなくて、今のご質問で、はっと考えたんですけども… はい、じゃあ、もうこれで厳しい質問で右往左往して、質問に答えられなくなってすごすご引き下がる、そういうことでもいいでしょうかね（笑）。じゃあ、これですすごすご引き下がりますので、どうもありがとうございました。（会場拍手）

角田太作。1991。世界の言語と日本語。東京：くろしお出版。

第7章。「所有傾斜」。

7. 1 所有者敬語

7. 1. 1 はじめに

- (7-1) 全体としては、陛下のご様子は落ち着いていらっしゃる。(テレビ ニュース)
- (7-2) 天皇陛下のご体温はもとの状態に戻られました。(テレビニュース)
- (7-3) 陛下のご体調はお弱りになっている。(テレビニュース)
- (7-4) 陛下の意識がおりになる。(新聞記事)
- (7-5) 病床の天皇陛下は、...その後ご容体は落ち着かれた。(新聞記事)
- (7-6) お体が弱っておられる。(テレビニュース)
- (7-7) ...内臓が大変お強いようだ。(雑誌記事)
- (7-8) 血圧は上がられました。(テレビニュース)
- (7-9) ...意識混濁も進んでおられる... (新聞記事)
- (7-10) ...体の衰弱はもうギリギリのところまで来ておられる... (新聞記事)
- (7-11) ...尿の出がきわめて悪くなっておられる。(新聞記事)
- (7-12) 陛下はこの日も待医の呼掛けに目を開けられた... (新聞記事)
- (7-13) 角田さんは舌が肥えていらっしゃるから...

7. 1. 2 所有傾斜

- (7-14) *天皇陛下の御用邸が地震でお潰れになった。
- (7-15) *陛下の所有地が台風で水浸しになりました。
- (7-16) 所有傾斜：

身体部分 > 属性 > 衣類 > (親族) > 愛玩動物 > 作品 > その他の所有物

7. 1. 3 所有者敬語(その1)：いわゆる尊敬語

[1] 身体部分。

Q,TT (7-17) 最近、天皇陛下の髪がすっかり白くなりました。(1.4/2)

Q,TT (7-18) 天皇陛下の脚はめっきり弱くなりました。(1.3/2)

[2] 属性。

Q (7-19) =上の(7-1) (1.2/2)

Q (7-20) =上の(7-2) (1.5/2)

Q (7-21) =上の(7-3) (0.5/2)

Q (7-22) =上の(7-4) (0.9/2)

〔3〕衣類。

Q,TT (7-23) ? 天皇陛下のお帽子が少し古くなりました。 (0.6/2)

Q,TT (7-24) ? 陛下の眼鏡がとても魅力的でいらっしゃいます。 (1.0/2)

〔4〕愛玩動物。

Q,TT (7-25) * 天皇陛下の愛犬が病気になられた。 (0.4/2)

Q,TT (7-26) * 陛下の馬が優勝なさいました。 (0.5/2)

〔5〕作品。

TT (7-27) * 天皇陛下のご著書が店頭に出ていらっしゃいます。

〔6〕その他の所有物。

Q,TT (7-28) * 天皇陛下のお車が故障なさいました。 (0.4/2)

Q,TT (7-29) = 上の (7-14) (0.4/2)

Q,TT (7-30) = 上の (7-15) (0.3/2)

親族の場合：

(7-31) A氏の令息が大学に入られた。 (大石 1983:127)

7. 1. 4 所有者敬語（その2）：いわゆる謙譲語

〔1〕所有物が自動詞主語である場合。

〔2〕所有物が直接目的語である場合。

Q,TT (7-32) 侍女が天皇陛下の手をお取りした。 (1.5/2)

Q,TT (7-33) 田中さんは天皇陛下の御用邸をお見かけした。 (0.8/2)

(7-34) 田中さんは天皇陛下の御用邸をお守りした。(影山太郎、私信)

(7-35) 山田さんは陛下のお荷物をお持ちした。(Harada (1976:526) の例文を一部修正)

〔3〕所有者が間接目的語である場合。

Q,TT (7-36) 侍女が天皇陛下の手にお帽子をお渡しした。 (1.4/2)

Q,TT (7-37) 田中さんは天皇陛下の御用邸にそのお荷物をお送りした。 (1.5/2)

〔4〕所有者が他動詞主語である場合。

Q,TT (7-38) ? 天皇陛下の穏やかな目はいつも国民の心を安らかにしていらしゃいました
(または、しておられました)。 (0.8/2)

Q,TT (7-39) ? 陛下のご病気が国民に大きな衝撃をお与えになった(または、与えられた)。
(0.6/2)

Q,TT (7-40) * 天皇陛下の所有地がその地域の開発を防がれた(または、お防ぎになった)。
(0.4/2)

(7-41) 直接目的語、間接目的語 > 自動詞主語 > 他動詞主語

Q,TT (7-42) 天皇陛下の穏やかな目はいつも国民の心を安らかにしていました。 (1.3/2)

Q,TT (7-43) 陛下のご病気が国民に大きな衝撃を与えた。 (1.7/2)

Q,TT (7-44) 天皇陛下の所有地がその地域の開発を防いだ。 (1.4/2)

(7-49) 直接目的語 > 自動詞主語 > 他動詞主語

(7-50) 太郎が 魚を 釣る。

(7-51) 雨が 漏る。

(7-52) 虫が 衣類 (など) を 食う。

7. 1. 5 個人差について

7. 1. 6 「正しい」敬語との関連

(7-53) まあ、お宅にはこんなかわいらしいわんちゃんがいらっしゃるんですか。

(7-54) お宅にはきれいな金魚がいらっしゃいますね。

図7 所有者敬語 (その1)

